

2016年9月5日

朝礼の話 (2016年9月)

皆さんお早うございます。先月30日、大型で強い台風10号が岩手県大船渡市付近に上陸しました。台風が太平洋側から直接東北地方に上陸するのは、統計開始(1951年)以来初めてとのこと。台風10号は8月19日に八丈島の東海上で発生しました。発生当初は台風9号と11号の近くに位置していましたが、両台風が北上し日本に上陸した後は、太平洋高気圧に北上を阻まれ、南西に進路をとりました。沖縄諸島の南海上の高水温地域で強い勢力となり、その後偏西風の寒冷渦に引っ張られるように北東から北に進路を変え、発生から11日後に東北太平洋岸に上陸しました。台風による大雨、強風で北海道、東北各地で河川の氾濫、土砂崩れ、倒木、冠水、浸水など大きな被害がでました。岩手県岩泉町の川沿いにあった高齢者施設で入居者9人が亡くなるという痛ましい被害が起きました。施設の近くを流れる川が氾濫し、施設内に濁流が流れ込んだものとみられています。災害時最も保護されるべき高齢者が避難の枠外に置かれ、痛ましい被害を受けました。何故今回の大惨事が起きたのか。防ぐことができなかったのか。当事者のみならず当該自治体、警察、消防関係者を含め十分に検証していく必要があります。

第31回夏季オリンピック大会は、8月5日(日本時間6日)から21日まで、ブラジル・リオデジャネイロで17日間の熱戦を繰り広げました。日本は、過去最多となるメダル総数41個を獲得しました。メダルの内訳は金12、銀8、銅21で金メダル数は3大会ぶりに二桁以上を獲得し、国別ランキングではロンドン大会の10位から6位に上りました。メダル総数では7位となりました。金メダル数1位は46個の米国で、2位英国(27個)、3位中国(26個)、4位ロシア(19個)、5位ドイツ(17個)でした。2020年東京大会で、日本は金メダル数25~30個を獲得して3位を目標としています。体操男子の白井健三選手(19歳)や卓球女子の伊藤美誠(みま)選手(15歳)など多くの10代選手も大活躍し、東京大会に向けて大いに期待が膨らみました。

日本競泳界のエースとして期待通り金メダルを獲得し開幕早々日本選手団を一気に勇気づけた男子400メートル個人メドレーの萩原公介選手、体操男子団体と個人総合の二つの金メダルを手中に収め、「世界で一番強い体操チーム」と「世界の個人総合王者」を同時に実現させた内村航平選手、五輪史上初の4連覇を達成した女子レスリング58キロ級の伊調馨選手、日本柔道界のホープとして一本勝ちにこだわる姿勢を貫きながら見事金メダルを獲得した男子柔道73キロ級の大野将平選手、最終ゲーム16・19の窮地から5連続ポイントで勝利し、バトミントン競技で日本初の金メダルをもたらした女子ダブルスの高橋礼華・松友美佐紀選手などなどさまざまな競技で日本選手が躍動し言葉で尽くせない程の感動をあたえてくれました。この中で最も印象深く心動かされたのは、選手団の主将として4連

覇に挑んだものの、決勝で相手に先行を許し最後まで逆転できずに銀メダルに終わった女子レスリング 53 キロ級の吉田沙保里選手でした。試合終了直後しばらくマットに突っ伏して顔を上げられず、試合後の取材や表彰台でも泣き続け、勝てなかった悔しさを体全体で現していました。自分が負けることは選手団の主将として他の選手の士気にも悪い影響を与えるという痛いほどの責任感も感じさせました。思わずテレビの前で「よくやった。泣かないでいいよ。」と言ってしまいました。もう一人は、卓球女子の福原愛選手でした。女子団体準決勝ドイツ戦の最終ゲームで大接戦を演じるも最後に敗れてしまいました。直後の取材に涙を必死にこらえながら「この負けはすべて私の責任です」と答え、15歳の伊藤美誠選手をかばう姿勢をみせました。3位決定戦でシンガポールに3-1で勝利し銅メダルを勝ち取った直後は、幼い時の「泣き虫愛ちゃん」が復活し泣きじゃくっていました。女子卓球をここまで強くし、国内でもメジャースポーツにしてくれた最大の功労者として「ありがとう」と素直に言いたい気持ちになりました。勝者であれ、敗者であれ試合直後の涙は、選手とその周りの人たちの努力、苦労が一度に表に現れて非常に印象深いものがあります。スポーツ競技は、努力が報われた選手、報われなかった選手、あと一步で勝ちを逃し悔し涙にくれる選手、それぞれに勝ち負けの結果を残酷なほどにさらけ出します。しかしその涙の価値（努力の価値）は勝者、敗者それぞれに重いものではないでしょうか。

以上